

●2015年 研究開発戦略説明会 質疑応答議事録

日 時 : 2015年4月2日(木) 13:30~14:30
場 所 : 株式会社富士通研究所 岡田記念ホール
説明者 : 株式会社富士通研究所 代表取締役社長 佐相 秀幸
取締役 鈴木 祥治
ソフトウェア研究所長 岸本 光弘

質問者 A

Q1. 研究開発予算約 300 億円の内訳を教えてください。川崎と厚木の配分、また国家プロジェクトへの参画や外部との共同研究、ベンチャーへの投資などがある中で、どの分野にどれだけの研究開発費を割り当てているのでしょうか。

A1. (佐相) 内訳は開示していません。研究員の人数比で言えば、国内全体では約 1,200 人の研究者がおり、うち厚木研究所は約 350 名です。厚木では、デバイス、マテリアル、ものづくりを中心に研究を行っています。国プロ関連の規模は 2 桁億円程度で、富士通と共に参加しています。

Q2. オープンイノベーションの中では、研究所に求められる役割として共同プロジェクトやベンチャー企業に対する目利きが重要になると思います。国プロ関連の予算が 2 桁億円ということで、全体の 300 億円に対して少ないと思いますが、この先中期的にはオープンイノベーションの取り組みは増えていくのでしょうか。

A2. (佐相) 研究技術を外部に出して事業部門から独立して研究を進めていくスキームも検討中です。QD レーザ(ベンチャー企業)などこれまで個々に議論していたものを体系化していこうとしています。また、富士通でもこのほど 50 億円のコーポレートベンチャーファンドを設立しましたので、そのスキームも活用していこうとしています。

Q3. 日立や東芝などの競合他社ではオープンイノベーションやノンリニアモデルという点から研究開発を見直しています。富士通ではまだリニアモデルのところが残っているようですが、他社の動きはどう映っていますか。また、ソーシャルイノベーションの分野において例えば人文系の研究者を入れるとか、富士通総研との融合はどのように考えていますか。

A3. (佐相) 応用研究センターでは大半の研究者が富士通グループの事業部門とタイアップしています。そこから外れたもの、つまり同じ KPI (Key Performance Indicators) で研究できないものをどうしていくかは日本の電機業界の共通の悩みであり、その点は全社的に議論していこうとしています。富士通総研は世の中の先の動きのところに優れた知見があり、人的交流やプロジェクト単位では現在でも連携しています。

Q4. 東京大学の吉川先生が第一種基礎研究、第二種基礎研究というお話をされています。先端研究には、シーズからとヒューマンソサイエティからの両方あると思いますが、後者は富士通総研になげているということでしょうか。

A4. (佐相) 先端研究は両輪です。ヒューマンソサイエティからのものについては、そういう場合もあります。

Q5. 研究者の 1 日の時間の使い方について伺いたい。実験、シミュレーション、フィールド調査、打ち合わせなど色々あると思いますが、どのようなイメージになるのでしょうか。

A5. (佐相) 研究テーマによって異なるので一概には言えません。

(岸本) 例えば ICT ソフトウェアの研究者は、ソフトウェアのコーディングやアルゴリズムを考えることに多くの時間を割いています。次に、事業部門やお客様との打ち合わせに当てる時間が多いです。

(鈴木) 社会問題を解決するソーシャルイノベーション分野の研究者は、お客様先や事業部門との打ち合わせ、フィールドワークに多くの時間を割いています。富士通研究所が持っている技術をまとめてシステムを作り出すので、事業部門との連携もありますが、やはり現場にいる時間が長いです。

以 上